

# テキストにおける文・発話の関係とテキストの構造化

野村 眞木夫\*

(平成12年11月28日受理)

## 要 旨

テキストは文・発話を単位として構成されている。さらにテキストの内部に多様なまとまりを認定することができる。本稿の目的は、研究史的な資源を参照しながら、テキストを構成する文・発話の談話標識・提題表現・叙述表現の関係、ならびに文・発話のもたらす効果の関係によって、テキストが構造化される過程と具体的な作動の様相を明示する方法を提案することにある。1. テキストにおいて文・発話の関係をどのように範疇化するか(観点と定義)；2. テキストを記述するシステムとテキストの構造化；3. 話し合いのテキストの記述とその構造化の過程、という3つの観点から議論を展開する。

## KEY WORDS

テキスト	Teksto	構造	Strukturo
文・発話	Frazo・Eldiro	作動	Operacio
関係	Rilato	マイクロ・メゾ・マクロのレベル	Mikro-, Mezo-, Makro-Nivelo

## 0. はじめに

テキストとは、人の行う言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相をさす。そこには、書き言葉・話し言葉ともにふくまれ、話し言葉にあって、そのコミュニケーションの参加者の数や参加者間の関係は多様でありうる。本稿は、テキストの構成素として、書き言葉には文、話し言葉には発話を認定し、文・発話の間に想定される関係性を範疇化する。これを規準として、テキストがどのように構造化されており、またコミュニケーションにおいてどのように作動しているのかを検討する方法を構築することが目的である。

### 1. テキストにおいて文・発話の関係をどのように範疇化するか

#### 1.1 文・発話の関係を範疇化する観点

複数の文・発話の間に想定される関係性は、言語学のみならず認知科学においても検討され、テキストに内在するまとまり、または構造を描くことに貢献している。

文・発話の関係性を範疇化するということは、テキストを構成する一つ一つの文・発話に割り当てられる行為(Francis and Hunston 1992, Stenström 1994)や機能(ザトラウスキー1993)

---

\* 言語系教育講座

を特定するのではない。複数の文・発話の間に認定される意味や概念の関係、あるいは接続の関係を特定するのである。この関係性を規準にして、テキストのまとまりかたやジャンルの特徴をとりだすことを指向する。以下で、文・発話の關係に着目してテキストのしくみを明らかにしようとした試みのいくつかをとりあげ、範疇化の方法とテキストの把握の仕方を整理する。

第1に、文・発話を結びつける形式的な指標を網羅的に認定する考え方がある。これは言語表現の内在するマイクロなシステムに着目し、そのなかで近傍の文との關係性を駆動する要因をとりだす考え方である。

Halliday and Hasan (1976) は、英語を対象として結束性 (cohesion) をとりあげる。結束性とは「テキストにおける1つの要素と、それを解釈するのに欠くことのできない他の要素との間の意味的な関係」(p.8)である。彼らは「結束的關係は、原則として、文の境界とはかかわりがない」(p.8)という。しかし、現実には「文が中心的な実体であるうちは……結束性が、實際上、1つの文を先行する文と結びつけるための意味的な資源の集合だ、と解釈することができる」(p.10)。だから、結束性の分析は、実態として複数の文の間に見いだされる關係に着目することになる。

これに対し、複数の文が与えられていることを前提にして、それらの文の間の關係性を取り上げる立場がある。

長田久男 (1984) は、「意義の繋がりを持った二つ以上の文の連続体」として「連文」を定義する。そうして、「連文的職能は言語の内的的意義に託されている役割である」(p.16)という仮説にたち、これを「連文論」と称する。Halliday 等による方法は、成立している文について「接続している文と文との続き方」(p.6)をとりあげているのだが、これは長田による狭義の連文の研究から区別される。長田は連文的職能の構文的職能に対する關係を明らかにすることを指向しており、これがその方法に一貫性をあたえている。すなわち、長田は文と文の間の意義の繋がりを取りあげるとき、文法的法則、あるいは連文法則をそこに帰納しようとする。渡辺実 (1971) の構文論において素材表示部の意義は消極的な働きしかしていないのであるが、それが連文において「連文的職能」の発動に直接関与していると考えられるからである (p.16)。

林四郎 (1973) は、文が文章を構成すべく現実に出現する時、どういうタイプの文になって現れるかを調査する。それが「始発型」「承前型」「転換型」であり、それぞれ何らかの因子によって形作られるとする (p.23)。典型的には文章の冒頭に出現する「始発型」では、「始発記号」として呼びかけの語、場面設定の語など、「始発要素」として場面ないし主題設定の文などがあげられる。「承前型」では、「承前記号」として接続詞と指示語、「承前要素」として語の意味の働き、語の付属形式の文法的な働き、文の成分の省略、先行文中の語の反復、「位置による承前」として発話文を解説する文、前文からの働きかけに応ずる文、などがあげられている。「転換型」では、「転換記号」として「では」「つぎは」など、「転換要素」として「つぎに」などの要素や時間場面を新たに設定する語句や文などがあげられる。

長田 (1984 : 16, 1995 : 92) は、言語の意義の役割を構文という観点からとらえた概念が「構文的職能」であり、それを連文という観点からとらえた概念が「連文的職能」だとする。この意味において長田の連文論は構文論との密接な關係がある。これに対し、林は、あらかじめ、文章の流れに参与する文の姿勢を3つのタイプに分類している。長田 (1995) が、自身の連文論を「「語」を単位とした文章の構造の解明」とし、林の研究を「「文」を単位とした文章の構造の解明」としたのは、上記のような差異が認められるからである。

ここに挙げた3者の方法は、文の内部構造、あるいはその構成要素としての語をとりあげる、という点において共通する。これに対して、文そのものを単位として、その内部には分析的に関与しない考え方がある。これを次に取り上げよう。

第2の方法では、接続表現や指示語のような指標に着目しながら、発話または文の相互関係を規定する。長田久男(1995)が「[文]を単位とした文章の構造の解明」として位置づけた方法の中核をなす。これは早い時期から提案されている。

鶴田常吉(1953)は、抽象的な立論にとどまるが、この領域に一定の方向をあたえている。鶴田は「文章は一つ以上幾つかの単位文から組成せられる」(p.391)とし、「但し単位文を羅列して文章を組成するには、各単位文に位を与へて羅列する。位は先行の単位文を関聯対象として与へられる」(p.392)という。鶴田の「位」とは「独立してゐながら何らかの地位をおびて他に相関聯してゐる」(p.123)ことである。鶴田は「位」の概念によって、テキストの展開において着目した文をその先行する文との関係において位置づけることを指向している。例示されている「位」は、主要なものとして「解説」「追加叙述」「因果的結論」「反因果的結論」「順態的結論」「逆態的結論」「期待的結論」「並列叙述」「後続叙述」「統括叙述」「実例」「例外叙述」の12種類をあげる(p.374f)。それぞれ、指標となる接続表現や文の意味関係が例示されている。

鶴田による「位」の考え方を具体化しようとした研究に、土部弘(1973)がある。土部は、「位」を「文相互の関連的地位」とみなす。「連鎖位」「反復位」「換言位」など14種の「位」を認め、指標として接続表現、指示語、反復、引用形式、呼応の関係などを規定する。

市川孝(1978:88以下)は、特に接続表現に着目し「文の接続関係の基本類型」として「順接型」「逆接型」など8種類を示す。永野賢(1986:104以下)は、「接続関係を示す言語形式」として接続語句、指示語、助詞・助動詞など、同語反復・言い換えなど、応答詞など、をあげ、これによって「接続関係の類型」を分類する。「展開型」「反対型」など9種類があげられる。

以上は、明示的に範疇化される言語形式に着目して、文の関係を認定する方法である。着目する言語形式は接続表現が中核となる。鶴田の「解説」、市川の「連鎖型」のように、限定された指標を規定しにくいばあいが含まれ、そのばあいは文の意味や内容に依存する類型として認定されている。

佐久間まゆみ(2000:第I部、など)による文章構造類型の研究は、永野や市川等の方法を展開するとともに要約文の研究を結びつけることで精密さを獲得している。内容面の話題のまとまりによる相対的な区分について、佐久間は書き言葉の「文段」と話し言葉の「話段」を「段」とよんで一般化する。段の成立には中心文・中心発話の統括機能が関与し、またこの段に文章・談話の「統括機能」を認め、それが文章型・談話型のしくみをかたちづくと考える。そこに多様な水準で「重層構造」を認めるのである。文や段の関係には市川の範疇が活用されており、細部の分析に係る単位は要約文の研究によって規定されている。

また、Halliday(1994)は、自然言語の文法は論理-意味論的な関係の集合を構成するとして、英語を対象に、接続詞と動詞の働きや意味に着目して「説明」「例提示」「付加」など10種類の関係を提示している。接続詞のみならず、動詞の意味をとりあげて範疇化した点で独創性が高い。

第3に、文のあいだに見いだされる意味の関係、あるいは概念の関係を規定することを主要な目的とし、とくにそれらの関係がテキストの部分で構造化する実態をとりだそうとする方法がある。この立場では、意味や概念の関係を具体化する言語表現の要素を列挙することを一次

的な目的としない。

西田直敏(1986)は、市川孝(1978)の類型化を批判的にとりあげながら、文の接続には、きわめてゆるやかな結びつきであるものや、文脈の中断や転換というべきものがあること、逆に文の「結合」ともいうべき緊密な関わり方があることを指摘する。そこに「文接続の緊密度」の度合いを基準にして文の接続の類型を考えることを提案する。西田は、この方法によって、緊密度のたかいものとして、先行文が問いかけ形式で後続文がそれに答える形式である文接続、緊密度のゆるやかなものとして、先行文と後続文が時間的な先後関係や空間的な位置関係を表現する場合などを例示している。網羅的な分類は示されていないし、また緊密度の認定基準を規定しにくい、先に示した2つの方法とことなった水準での問題提起である。

林四郎(1998:第10章)は、「相接するいくつかの文が、特に密接な関係を保ち、文脈の中では、融合合体して1文になったような効果を持つに至ること」を「文塊化」とよび、これを「注ぎ」「括り」「並び」「相対者の合体」によって起こるといふ。「注ぎ」などはそれぞれ文間や文塊間に見いだされる関係によって定義・下位分類される。「注ぎ」などの範疇化は、文塊が文脈の進行方向に広がるか、前に戻るかなどの方向性のちがいでよっている。文塊という概念は、単に文の関係というのではなく、2文以上のまとまり、林の言い方では「文間におこる雪だるま現象」を想定している点で、第2の方法とおおきく異なる。

文の関係を範疇化するときに「関係的な構造 (relational structure)」あるいは「一貫性の関係 (coherence relation)」を強調する立場がある。これは認知科学の領域における研究にしばしば見られる。範疇化の方法をいくつかとりあげよう。

Hobbs(1978, 1990)は、談話を一貫性のあるものにしようとするとき、その一貫性が談話の分節間の「一貫性の関係」の集合によって特徴づけられる、という。その関係がテキストの分節を結びつけてテキスト全体の巨視的な構造をもたらす、と考えるのである。Hobbsが提案する関係は、「強い時間的な関係」(因果関係も含む)、「評価の関係」「連鎖の関係」(地と図の関係、説明の関係)、「展開の関係」(詳述を含む並列の関係、一般化の関係、例示の関係、対比の関係)である。

Dahlgren(1988:Ch.8)は、新聞や雑誌の解説的なテキストを資料として、一貫性の関係に「継起」「報告事象」「可能化」「原因」「目的」など20種類を提案している。Dahlgrenの研究は、それらの関係範疇をもちいて具体的なテキストを解析し、分節化することによって、その階層的な構造を描きだすことを最終的な目的としている。

Mann and Thompson(1988)とMann, Matthiessen and Thompson(1992)では、テキストに見いだされる関係をそれぞれ非対称的にとらえる。すなわち、関係において相対的に中心となる「核 (nucleus)」と核に対して周辺的な位置づけになる「衛星 (satellite)」との2つの部分を認定し、核と衛星のあいだに関係を規定するのである。この関係にはMann, Matthiessen and Thompson(1992)では「状況」「解決」「詳述」など21種類があげられている。ただし、若干の関係は「多一核関係 (multi-nuclear relation)」となり、対称的なスキーマが形成される。この関係には「継起」「対比」「結合」の3種類が認められている。Mannたちの設定した関係も、HobbsやDahlgrenと同様にテキストの組織の主要な側面を記述する理論として提案されたものである。

以上3つに区分して、文・発話の関係を範疇化する方法として、これまでに行われてきた仕事をとりあげた。

第1の方法は、すでにのべたようにマイクロな統語的なシステムを指向する傾向が強く認められる。とくに、長田久男の連文論が端的にこの特徴を示している。第2の方法では、テキストを構成する文の内部構造の分析に積極的に関わることを回避しても、複数の文が接続するときの文間の関係と接続の手段とに着目することが可能である。接続詞を中核として分析した市川孝の仕事が、この方法の典型である。佐久間まゆみの方法では文の内部構造をも、視野に入れている。第3の方法は、テキストの構成要素としての文の関係に着目するとき、つねにその関係がテキストの組織化やテキストの構造化に効果をもつものとして認定されるのである。この組織化や構造化という観点は、第3の方法が積極的に指向する点である。

いま、テキスト言語学の方法を次の3つのレベルとして設定しよう。

- (1) a. マイクロのレベル：形式的な特徴や語の意味、統語論の範疇を指標として、文や発話相互の関係性を規定する。
- b. メゾのレベル：文や発話の意味・機能あるいは表現類型の範疇を指標としてテキストおよび部分テキストのまとまりの組織を規定する。
- c. マクロのレベル：テキストおよび部分テキストの組織や類型性を指標としてテキストを文化的・社会的あるいは制度的に規定する。

このようにとらえると、第1の方法は、あきらかにマイクロのレベルである。第2の方法は、マイクロのレベルからメゾのレベルへの橋渡しの部分に位置づけられる。佐久間の方法は、さらにマクロのレベルに言及している。第3の方法は、メゾのレベルを中核とし、マクロのレベルへの橋渡しを可能にしている。

## 1.2 テキストにおける文・発話の関係性

前節で整理したように、テキストにおいて文・発話の関係性をとらえる方法は多様であり、また目的に応じて選択の余地がある。

本稿では、つぎのような問題を考える。すなわち、書き言葉・話し言葉をともに同一の枠組みでとりあげ、テキストとしてのまとまりかたを関係の範疇に依存しながら記述する、ということである。これは(1)の範疇に即していうならば、メゾのレベルの分析を基礎にして、マクロのレベルでの組織または構造に言及するという、さらに言い換えるならばメゾとマクロのレベルの境界領域を探求するということである。これによって、個々の文・発話がテキストの組織化・構造化にどのような貢献をしているのか、あるいはコミュニケーションの参加者がテキストの組織化や構造化の過程においてどのように働きかけているのかを探るのである。

本節では、そのための記述装置として、先行研究を参照しつつ、文・発話の関係性の範疇を規定する。(2)にその範疇を一覧し、定義をしめす。テキストにおいて着目した文・発話をもたらす効果として定義を行っている。定義において、文や発話を〔提題表現 (theme) — 叙述表現 (rheme)〕の形式に分析して認定する。提題表現は、有題文において「～は」の成分によって代表される部分である。無題文については、「～が」の成分を提題表現に準じて認定する。叙述表現は、基本的に提題表現以外の部分である。また、「文脈」というのは、言語文脈と非言語文脈をともにふくむものとする。

各範疇は、いずれも先行文脈から後行文脈へという方向で規定している。たとえば、(2d)の「一般化」と「詳述」は方向を無視すれば同一の範疇と認めることが可能だが、ここでは方向を考慮するので区別してある。範疇は4類40種を認めた。

## (2) a. 時間

時間軸導入：時間軸を導入し、先行する文脈で時間軸から解放されていた事態・状態をその時間軸上に位置づける。

時間軸解放：先行する文脈が位置づけられていた時間軸を解放する。

状況(時間)：先行する文脈に対して異なる、または新たな時間を時間軸上に特定する。

継起：着目した文・発話の事態・状態が先行する文脈のそれに継起している。

同時：着目した文・発話の事態・状態が先行する文脈のそれと同時に成立している。

## b. 場所・空間

場所・空間軸導入：先行する文脈で場所・空間軸から解放されていた事態・状態を場所・空間軸上に位置づける。

場所・空間軸解放：先行する文脈が位置づけられていた場所・空間軸を解放する。

状況(場所・空間)：先行する文脈に対して異なる、または新たな場所・空間を場所・空間軸上に特定する。

## c. 心理

評価(感情)：先行する文脈の内容に言及してその感情的な評価を行う。

評価(感覚)：先行する文脈の内容に言及してその感覚的な評価を行う。

## d. 論理・概念

話題提示：先行する文脈の話題、または新たに話題とする対象・事態・状態を簡潔に提示する。

話題終了：先行する文脈の話題を明示的に終了させる。

一般化：先行する文・発話の提題表現と同一またはその上位概念を提題表現とし、先行する文・発話の叙述の上位概念またはより簡潔な概念によって叙述を行う。

詳述：先行する文・発話の提題表現と同一またはその下位概念を提題表現とし、先行する文・発話の叙述の下位概念またはより詳細な概念によって叙述を行う。

対比：先行する文・発話の提題表現の同位概念を提題表現とし、たがいに矛盾・対立する叙述表現を提示する。

類比：先行する文・発話の提題表現の同位概念を提題表現とし、たがいに整合する叙述表現を提示する。

反復：先行する文脈と同一の内容を、同一の表現によって再度提示する。

換言：先行する文脈と同一の内容を、異なる表現によって再度提示する。

修正：先行する文・発話の全体またはその一部に言及し、これを否定する表現におきかえて、再度提示する。

情報補足：先行する文・発話で省略されたり不完全に表現されていた語句を補う。

原因・理由：先行する文・発話で言及されている事態・状態をもたらす原因・理由またはその動機となった事態・状態を提示する。

結果・結論：先行する文・発話で言及されている事態・状態をもたらす結果・結論またはそれを動機とする事態・状態を提示する。

譲歩：先行する文脈から想定される事態・状態の否定を容認する内容を提示する。

保留：先行する文脈に対する関係を明示した内容の表現を保留する。

反予測：先行する文脈から想定される事態・状態に反する内容を提示する。

前景提示：先行する文・発話で言及されている事態・状態を前提または状況とし、テキストにおいて主要な情報・中核となる出来事を構成する事態・状態を提示する。

背景提示：先行する文・発話で言及されている事態・状態をテキストにおける主要な情報・中核となる出来事とし、それに対する前提または状況となる事態・状態を提示する。

発話・思考内容：先行する文・発話で言及されている事態・状態において発話・思考された内容を提示する。

発話・思考解説：先行する文・発話で言及されている発話・思考の内容について、その発話・思考の表現方法を提示する。

評価（価値）：先行する文脈に言及してその価値評価を行う。

質問提示：先行する文脈、文・発話で言及されている事態・状態・状況または新たに提示された話題に言及して任意の事項や認否の確定を解除する。

質問応答：先行する文・発話で提示された質問に言及して任意の事項や認否を確定する。

問い返し：先行する文・発話で提示された質問の部分または事項に言及して、質問の内容を確定することを保留する。

方向付け：先行する文脈、または文・発話で言及されている事態・状態・状況に対して、以下に展開するテキスト・状況の方向性を明らかにする。

情報認識：先行する文脈、または文・発話で言及されている内容を認識していることを明らかにする。

解釈：先行する文脈に対して、コミュニケーションの参加者による意味を付与する。

交話：先行する文脈に対して、一定の条件において定型化された言語形式を提示する。

呼びかけ：先行する文脈のいかんにかかわらず、コミュニケーションの任意の参加者の注意をひく発話を行う。

メタ言語<sub>1</sub>：先行する文・発話に言及して、その表現方法や属性を明らかにする。

メタ言語<sub>2</sub>：後行する文・発話を想定して、その表現方法や属性を明らかにする。

これらを具体的なテキストに適用し、テキストを記述することによって、それがどのように構造化されているのかを検討することができる。文・発話の関係の記述は(3)のように行う。関係が複数認められるときは、それをコンマで区切って列挙する。また、関係する先行文脈中の文が複数であるばあいは、その文の番号をすべて記入することができる。たとえば(4)の部分テキストにおいて、 $S_1$ と $S_2$ の関係は、(5)のように記述できる。(5)は、 $S_2$ に着目したとき、詳述と時間軸導入の2つの範疇で関係しており、その関係する先行文脈がそれぞれ $S_1$ であることを表している。テキストの冒頭の文については、先行する文脈の番号を(0)とする。特に、話し言葉のテキストでコミュニケーションの環境に言及する発話や呼びかけの発話は、その先行する文脈の番号を(\*)と記述するものとする。また、必要に応じてく>内に分析者の注を記入する。

(3) 関係の範疇（先行文・発話の番号または非言語文脈の標識、後行文・発話の番号）

(4)  $S_1$ 人間はホモ・サピエンスであると同じ程度に根源的にホモ・ルーデンス（遊戯者）である。 $S_2$ ニーチェはその病誌によれば、遊びが逝ったために早く失われた幼年時代を、ふたたび取りもどしたいという望みをもっていた。（霜山徳爾『人間の限界』岩波書店：

30)

(5) 詳述 (S<sub>1</sub>, S<sub>2</sub>), 時間軸導入 (S<sub>1</sub>, S<sub>2</sub>)

## 2. テクストを記述するシステムとテキストの構造化

本節では、テキストが構造化される過程を描写するために、2つのシステムを複合させる方法を導入する。

システムの1つは、文や発話を〔提題表現—叙述表現〕の形式に分析し、その連続体として記述するものである。無題文において、「～が」の成分を提題表現に準じて認定するが、記述においては、( )でくくって示す。省略された成分を補うことはしない。さらに、このシステムに接続表現、呼びかけ表現、叙法副詞などによる談話標識を組み込んで示す。

もう1つのシステムが、文・発話の関係性の記述で、前節で提案した方法である。この2つのシステムを複合的に観察することで、それぞれのテキストがどのような過程で構造化されているのかをとらえることが可能になる。

まず、簡単なテキストによって、適用例をしめすことにしよう。(6)がそのテキストであり、2つのシステムによってこれを分析した結果は、表1と表2ようになる。

(6) ①大きな買い物袋と、その日持って出た大ぶりのハンドバッグを膝に載せて、片手で落ちないように抱えこみながら本を読んでいた。②つぎの駅は他の線との乗り入れ駅になっているので、またどっと人が乗ってきました。③小柄なお婆さんが人混みに押されるようにして、むこうのドアから乗ってきました。④ドアの脇の座席の棒につかまって立ちました。

⑤私が立つにはちょっと離れ過ぎているし、とためらっているうちに私の三人ほど置いたむこうの席の女性が立ちました。⑥そしてその人は、お婆さんの立っているところまで二、三步歩いて「どうぞ」と言ったのです。

⑦そんなとき私だったら「どうぞ」と言ったまま自分は相手の人が立っていた場にとどまって、その人と入れ換わるように立ってしまうのですが、その人は違いました。

⑧「どうぞ」というように自分のかけていた席を手で示すと、もう片手で、そうっとお婆さんの肩に手をかけて、いっしょにその席まで来たのです。⑨そしてお婆さんが腰をおろすまで、ずっとそばにいて見守っていたのです。⑩ちゃんと腰をかけるのを見届けてから、お婆さんから、目を離れたのです。⑪しぐさに表れるお人柄を、感じました。

(渡辺一枝「「こちらにどうぞ」『王様の耳はロバの耳』講談社：38f)

表1・表2から次のことが明らかになる。テキストの中核となる部分は、継起的な展開になっており、まとまったエピソードとして認定することができる。テキストの最初にそのエピソードの背景が提示され、最後に評価が行われていて伝統的な物語の構造を備えている。

マイクロのレベルで観察すると、文①がその背景の表現、文②で物語の状況が指定される。その次に、文③④および⑤でテキストの参加者をとりあげて、文⑥以下、⑩まで時間軸にそって参加者の関わり合いを中軸とするエピソードが展開されている。その展開は、文⑦の後半(7b)でエピソードの核となる動作の状態が描写され、文⑧以下ではその時間を細分化し、動作を詳述する方法によって行われている。最後の文⑪は、このエピソードが展開する部分についての評価である。



表1 テキスト(6)の談話標識・提題表現・叙述表現

文	談話標識	提題表現	叙述表現
1			大きな買い物袋と～本を読んでいました
2 a		つぎの駅は	～乗り入れ駅になっているので
2 b		(人が)	乗ってきました
3		(小柄なお婆さんが)	乗ってきました
4			立ちました
5		(～女性が)	立ちました
6	そして	その人は	「どうぞ」と言ったのです
7 a		私だったら	～立ってしまうのですが
7 b		その人は	違いました
8			～いっしょにその席まで来たのです
9	そして		～見守っていたのです
10			～目を離したのです
11			お人柄を感じました

表2 テキスト(6)の文の関係

文	文の関係
1	背景提示 (0, 1), 時間軸導入 (0, 1)
2 a	同時 (1, 2 a), 話題提示 (1, 2 a), 状況 (場所) (1, 2 a)
2 b	同時 (2 a, 2 b), 話題提示 (2 a, 2 b), 結果・結論 (2 a, 2 b)
3	同時 (2 b, 3), 話題提示 (2 b, 3)
4	継起 (3, 4)
5	継起 (4, 5), 話題提示 (4, 5)
6	継起 (5, 6)
7 a	詳述 (6, 7 a), 話題提示 (6, 7 a)
7 b	継起 (6, 7 b), 対比 (7 a, 7 b)
8	継起 (6, 8), 詳述 (7 b, 8)
9	継起 (8, 9), 詳述 (7 b, 9)
10	継起 (9, 10), 詳述 (7 b, 10)
11	評価 (7 b~10, 11)

以上の記述は、表1のシステムでは、観察される提題表現と接続表現、叙述表現の文末の形態、特にタ系列と非タ系列のいかん、アスペクト形式の選択、「のです」によって規定される。表2のシステムでは、状況、話題提示、同時・継起の区別、詳述の関係、評価が構造をとりだす主要な関係となっている。

このような関係性のシステムがテキストのメゾのレベルでの構造をつくりあげ、これがマクロのレベルにおいては、[背景—状況—参加者の導入—参加者の関わり合いによるエピソード—エピソードの評価]のように、物語のジャンルを構造化しているのである。

### 3. 話し合いのテキストの記述とその構造化の過程

2節では、1節で提案した方法に従って書き言葉の簡単な部分テキストを分析してみた。本節では、話し言葉の例をとりあげる。ここでは、数名の生徒を参加者とするクラスルーム・トークを例として（有澤俊太郎1996参照）、コミュニケーションの参加者がどのように関係しあい、テキストを構造化しているのかを検討し、方法論の有効性の検討を行う。

まずテキストをしめす。小学校4年生による国語科の授業で収録した生徒による話し合いである。ここで行われている話し合いは、次のような授業の展開の中で行われている。あらかじめ、教材として与えられた複数の詩の中から、各生徒が好きなものを1つ選んでいる。その選択に応じて、数名ずつのグループを構成し、選んだ詩の良さを各自が記入したシールを参照しながら、意見を少数に集約するものである。話し合いの継続は10分間に制限されている。

次の例は、男子5名で構成されたグループで、意見を集約する過程で行われた話し合いの一部である。このグループでは、作業用のテーブルの1つの長辺にA B、その向かい側の長辺にC D Eが着席している。(7)は、グループでの話し合いの開始後約6分30秒を経過した時点で、教師の助言をもとめて呼びかけを行った直後から、他のグループに助言していた教師がこのグループに応じるまでの部分、約50秒間である。(7)では、詩からの引用を『 』で、生徒のシールからの引用を「 」で区別してある。このテキスト(7)を、テキスト(6)と同様のシステムによって分析した。分析の結果は、表3と表4である。

- (7) 1 C 2つか3つって言ったもん。  
 2 D 2つか3つ？  
 3 B ねー。  
 4 A そ2つか3つだよ。  
 5 B ねー、ね//先生さあれ、  
 6 A Dの「箱のようだ」いーよねー、なんかね。  
 7 B 先生さっきさ、か、  
 8 C あー、じゃこー発表しよ？  
 9 C 「紙風船は願い事がつまっている大きな箱のよう」で、  
 10 C あのこれ//『もっともっ』ってゆー、  
 11 B 大きな風船ってかんじだよ。  
 12 C えー？  
 13 B いや？  
 14 B ただ言った、  
 15 C 「大きな箱」って書いてあるもん。  
 16 B 箱でいーよ。  
 17 C 「大きな箱のよう」で、  
 18 D (あんね) こっからはゆ、  
 19 D これは「夢がつまっている」、  
 20 C はは//こ。  
 21 D てゆー、あの一まとまりで一。

- 22C あっ、「紙風船は願い事//がつまっている大きな箱のよう」に// ( )
- 23B おれは風船って考えただけや。
- 24D あ「願い事」ね。
- 25C 「箱のよう」で、
- 26C 『もっともっと』ってゆーのは、「夢がある」ってゆーんじゃないかなと思った。
- 27B ねー。
- 28A (1.4) なに。
- 29D こっち//は「夢がある」でしょ、
- 30B あれ、す、さっき//説明の紙あったでしょー? =
- 31D 「夢がある詩」ってゆーの ( ) で、
- 32B =先生が。{A説明の紙の探求を開始する}
- 33D こっちが一、
- 34B //説明の紙なんでもらった?
- 35C ちょっと待って、いーこと考えた。
- 36C 『もっともっと』って「夢がある」みたいでー、
- 37C //あの、『何度でも打ち上げ』るー、「強い心」がわかる。
- 38D んー。
- 39A 説明の紙どこやった。

2つのシステムによる分析から、次のことを議論することができる。

第1に、マイクロのレベルから考えると、まず、提題表現は詩とシールに言及するものが半数以上であることが明らかである。関係性の特徴からは、テキスト(6)との差異を取り出すことができる。時間軸の導入は3回行われているが、この時間軸にそったエピソードの展開はない。評価も欠けている。それに対し、質問の提示と、保留を含めてそれに対する応答が高い頻度で行われている。さらに自分の発話に対する詳述の他、修正、方向付けが散見する。関係性の範疇のうち、時間、場所・空間、心理の項目が少数であるか欠けており、論理・概念に区分される範疇が多く見られる。

第2に、メゾのレベルでとらえると、教室での話し合いの内在する特徴が明らかになる。

まず、はじめの1C、2D、4Aの発話であるが、これは、あらかじめ教師が意見を2~3個に集約するように指示したことを受けて行われている。1Cは教師の発話を引用する形式を採用している。2Dは引用部分を反復することで、質問を提示する。4Aはこれに対する応答だが、引用の形式を採用していない。表現の類型としては、描出表現(描出話法、体験話法、自由間接話法)として区分される(野村2000:第5章)。Maybin(1999)によれば、この表現類型が教室で行われる傾向があるのは、発話者のテーマが、異なる評価を持つ立場との対比に焦点化されているときである。この例では、2Dが「2つか3つ」ではない可能性を示唆すると理解したAが、教師の発話に描出表現をもちいて言及することで、Aと教師さらに発話の受け手であるCDを、この発話に対等に関係させる効果をもたらしている。

つぎに、Bの発話に着目する。まず、Bは、3B、5B、7Bで呼びかけを行いつつ「先生」を提題表現としてとりあげながら、他の参加者との間で関係性を成立させることに失敗している。映像資料で確認すると、この間、Bの視線は前方に着席しているCDEに均等に向けられている。11Bから23BにかけてのBの発話は、Cの意見に対する修正と15Cによる反論への対

表3 テキスト(7)の談話標識・提題表現・叙述表現

発話	談話標識	提題表現	叙述表現
1 C			2つか3つって言ったもん
2 D			2つか3つ
3 B	ねー		
4 A			2つか3つだよ
5 B	ねー	先生	
6 A		Dの箱のようだ	いーよねー
7 B		先生	さっきさ
8 C	じゃ		こー発表しよ
9 C		紙風船は	願い事が詰まっている大きな箱のようで
10 C	あの	これ	もっともっとなってゆー
11 B			大きな風船ってかんじだよ
12 C	えー		
13 B			いや
14 B			ただ言った
15 C			大きな箱って書いてあるもん
16 B			箱でいーよ
17 C			大きな箱のよーで
18 D		こっからは	
19 D		これは	夢が詰まっている
20 C			はこ
21 D			まとまりで
22 C	あっ	紙風船は	願い事が詰まっている大きな箱のよーに
23 B		おれは	風船って考えただけや
24 D			願いごとね
25 C			箱のよーで
26 C		もっともっとなってゆーのは	夢があるってゆーんじゃないかなと思った
27 B	ねー		
28 A			なに
29 D		こっちは	夢があるでしょ
30 B	あれ	説明の紙	さっきあったでしょー
31 D			夢がある詩ってゆー
32 B		(先生が)	
33 D		(こっちがー)	
34 B		説明の紙なんて	もらった
35 C			ちょっと待って、いーこと考えた
36 C		もっともっとなって	夢があるみたいでー
37 C			何度でも打ち上げるー強い心がわかる
38 D			んー
39 A		説明の紙	どこやった

表4 テキスト(7)の発話の関係

発話	発話の関係
1 C	話題提示 (0, 1), 方向付け (0, 1)
2 D	質問提示 (1, 2), 反復 (1, 2)
3 B	呼びかけ (*, 3) <視線→C~E>
4 A	質問応答 (2, 4), 反復 (2, 4)
5 B	呼びかけ (*, 5), 話題提示 (4, 5) <いいさし>
6 A	話題提示 (4, 6)
7 B	情報補足 (5, 7), 状況(時間) (5, 7) <いいさし>
8 C	方向付け (6, 8)
9 C	詳述 (8, 9)
10 C	対比 (9, 10) <いいさし>
11 B	修正 (9, 11), 解釈 (9, 11)
12 C	質問提示 (11, 12)
13 B	保留 (12, 13)
14 B	メタ言語 <sub>1</sub> (11, 14) <いいさし>
15 C	詳述 (12, 15), 修正 (11, 15)
16 B	譲歩 (11, 16), 情報認識 (15, 16)
17 C	反復 (9, 17)
18 D	話題提示 (17, 18) <いいさし>
19 D	話題提示 (18, 19)
20 C	<いいさし>
21 D	話題提示 (19, 21)
22 C	修正 (18~21, 22)
23 B	メタ言語 <sub>1</sub> (11, 23), 時間軸導入 (11, 23)
24 D	反復 (22, 24), 情報認識 (22, 24), 修正 (19, 24)
25 C	修正 (22, 25)
26 C	対比 (22・25, 26), 話題提示 (22・25, 26), 解釈 (10, 26), 時間軸導入 (25, 26)
27 B	呼びかけ (*, 27) <視線→A>
28 A	質問提示 (27, 28)
29 D	換言 (26, 29)
30 B	質問応答 (28, 30), 質問提示 (28, 30), 話題提示 (28, 30), 時間軸導入 (28, 30), 状況(時間) (28, 30)
31 D	換言 (29, 31)
32 B	反復 (5, 32), 情報補足 (30, 32)
33 D	対比 (29・31, 33) <いいさし>
34 B	質問提示 (30, 34), 継起 (30, 34)
35 C	方向付け (33, 35)
36 C	話題提示 (35, 36)
37 C	情報補足 (36, 37)
38 D	情報認識 (36, 38)
39 A	質問提示 (*, 39), 継起 (30, 39)

応であり、先の呼びかけ発話との関係は認められない。ところが、27Bの呼びかけは、視線を隣席のAのみに向けていて、Aはこれに応じている。30B～32Bの発話に現れる「さっき」と「先生」は、5B～7Bのいいさしの発話にも現れていたことから、これを再度とりあげようとしたものと理解できる。ここでは選択的にAに呼びかけたため、「説明の紙」をA Bの間で話題とすることに成功し、Aは39Aで他の参加者に質問を提示するにおよぶ。AはBを媒介(Kang 1998参照)することで、C D Eをこの話題に関係させ、あらたな関係性を創出しているのである。

これ以外の部分は、6Aから「箱のようだ」をと中心語句する意見の集約、26Cからは「夢がある」を中心語句とする意見の集約であり、いずれもDの発話を補助的な提案として介入させながら、Cの発話がまとめる作動をはたしている。

以上のように(7)は、まとめ方を規定した後、話題として提示された意見を集約する関係を基調として展開している。そこに「説明の紙」の確認と探求行動が、順次、関係性を強め、組織を変動させる過程を内在させて、マクロ・レベルの構造化がなされている。話し合いにおけるこの部分テキストは、生徒の経験の提示や事象の報告などではなく、目的をもった展開であり、情報を説明・解釈したり、作業上の質疑に寄与する発話が中核をなしている。

#### 4. む す び

本稿では、まず、文・発話の関係を範疇化する方法を、先行研究を参照しながら検討した。さらに、その範疇を仮定し、これによりながら2つのテキストを分析した。分析は、「談話標識・提題表現・叙述表現」と「文・発話の関係」の2つのシステムによって行い、マイクロ・メゾ・マクロの3つのレベルから考察した。テキストがどのような関係性を内在し、作動させており、またそれによってテキストがどのように構造化されているのかを明らかにできることを示した。以上、話し言葉か書き言葉かにかかわらず、テキストの構造化の過程とその具体的な作動の様相を記述し、説明する方法の試みとして提出する。

#### 引用文献

- 安達隆一 1987. 『構文論的文章論』和泉書院
- 有澤俊太郎 (研究代表者) 1996. 『教育実践場面分析演習「国語」の研究 I』上越教育大学言語系教育研究系国語コース
- Dahlgren, K. 1988. *Naive Semantics for Natural Language Understanding*. Kluwer Academic Publishers.
- Francis, G. and Hunston, S. 1992. "Analysing everyday conversation." in Coulthard, M. ed. *Advances in Spoken Discourse Analysis*. Routledge.
- Halliday, M. A. K. and Hasan, R. 1976. *Cohesion in English*. Longman. (安藤貞雄他訳 1997『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房)
- Halliday, M. A. K. 1994. "The construction of knowledge and value in the grammar of scientific discourse, with reference to Charles Darwin's *The Origin of Species*." in Coulthard, M. ed. *Advances in Written Text Analysis*. Routledge.

- 土部 弘 1973. 『文章表現の機構——国語教育の実践原理を求めて——』くろしお出版
- 林 四郎 1973. 『文の姿勢の研究』明治図書
- 林 四郎 1998. 『文章論の基礎問題』三省堂
- Hobbs, J. R. 1978. "Why is discourse coherent?" *SRI Technical Note*. 176.
- Hobbs, J. R. 1990. *Literature and Cognition*. CSLI.
- 市川 孝 1957. 「文章の構造」『講座 現代国語学 II』筑摩書房
- 市川 孝 1978. 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- Kang, M. A. 1998. "Strategies of inclusion: Addressee(s) in triadic exchanges." *Text*. 18-3.
- Mann, W. C. and Thompson, S. A. 1988. "Rhetorical Structure Theory: Toward a functional theory of text organization." *Text*. 8-3.
- Mann, W. C., Matthiessen, C. M. I. M. and Thompson, S. A. 1992. "Rhetorical Structure Theory and Text Analysis." in Mann and Thompson eds. *Discourse Description: Diverse Linguistic Analyses of a Fund-Raising Text*. J. Benjamins.
- Maybin, J. 1999. "Framing and evaluation in ten- to twelve-year-old school children's use of repeated, appropriated, and reported speech in relation to their induction into educational procedures and practices." *Text*. 19-4.
- 永野 賢 1986. 『文章論総説』朝倉書店
- 長田久男 1984. 『国語連文論』和泉書院
- 長田久男 1995. 『国語文章論』和泉書院
- 西田直敏 1986. 「文の連接について」『日本語学』5-10.
- 野村眞木夫 2000. 『日本語のテキスト——関係・効果・様相——』ひつじ書房
- 佐久間まゆみ編 1989. 『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- 佐久間まゆみ編 1994. 『要約文の表現類型』ひつじ書房
- 佐久間まゆみ(研究代表者) 2000. 『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』平成9年度～平成11年度科学研究費研究成果報告書
- Stenström, A-B. 1994. *An Introduction to Spoken Interaction*. Longman.
- ザトラウスキー, P. 1993. 『日本語の談話の構造分析』くろしお出版
- 鶴田常吉 1953. 『日本文法学原論 後編』関書院
- 渡辺 実 1971. 『国語構文論』塙書房

## Rilatoj de Frazoj/Eldiroj en Teksto kaj ĝia Strukturo

Makio NOMURA\*

### RESUMO

Ni organizas tekston el frazo kaj eldiro. Kaj ni komprenas diversan koheron en teksto. La celoj de tiu ĉi artikoro estas unue espoli ĝian studan historion, kaj sekvante hipotezi la procezon, en kiu teksto organizi ĝian strukturon, kaj la metodo, per kiu specifiki operacion de teksto, ne nur per diskursa markilo, temo kaj predikato de frazo kaj eldiro, sed ankaŭ per ilia efiko. Tiu ĉi artikoro argumentas, 1. la rilataj kategorioj de frazoj kaj eldiroj en teksto (vidpunktoj kaj definoj); 2. priskriba sistemo kaj strukturo de teksto; 3. priskribo de intertrakta teksto kaj procezo de organizi strukturon de teksto.

---

\* Division of Languages: Department of Japanese Language.